

《臨地講演》

慈鎮和尚と青蓮院

赤 松 俊 秀

青蓮院が慈鎮和尚で知られておりますことは、申すまでもないことであります。しかし真宗の流れをくむ人間としましては、この青蓮院が親鸞聖人得度の地であるかどうかということが大きな問題でなからうかと思うのであります。皆さんよく御承知のように、『御伝鈔』には、親鸞聖人が、この青蓮院で慈鎮和尚について、九歳の時に得度をされたということになっています。毎年の報恩講ごとにこの『御伝鈔』を聞かしていただく真宗の者にとって、それが事実として一般に観念されているのは、当然ではなからうかと思うのであります。しかし真宗の伝承に拘束されないで、純正の、史学の立場から申して、親鸞聖人が青蓮院で得度されたのは、まちがいない事実であるかどうかということになりますと、そこに一つの問題がある、と考えられています。親鸞聖人が九歳の春におじの範綱に連れられて、慈鎮和尚を青蓮院に訪ね、ここで得度された時の度牒が、今日本願寺に残っておりますならば、なにも申すことはないのですが、色々のものを多く残しておられます西本願寺の宝庫にも、さすがに親鸞聖人の度牒というようなものは、今日保存されていません。そこで親鸞聖人の青蓮院得度がはたして事実である

かどうかということが、まず問題になってくるのでありますが、それと申しますのも『御伝鈔』の第一段に語られていることが、事実と認むべきかどうか、学界がかなり懷疑的であった、疑問を持っていたということが、大きく影響していると思います。

まず第一には、親鸞聖人の御俗姓というものが、『御伝鈔』に語られているとおりであるかどうかということが、問題であったわけであります。次には、慈鎮和尚が、親鸞聖人九歳の時に、得度をされた時に、この青蓮院の地におられたかどうか。青蓮院というものを管理しておられたかどうかということが問題でありました。最初にわたくしの結論を申し上げますと、親鸞聖人が九歳の春、ここで慈鎮和尚について得度をせられたという『御伝鈔』の伝えというものは、そのまま信じてまちがいない。そのまま信じてよろしいということであります。その根拠を簡単に申し述べさせていただきますと、まず最初に、親鸞聖人の御俗姓は、なくなられた中沢見明さんの『史上親鸞』という爆弾的な著書が問題にされましたが、それも大谷大学の山田文昭先生が『尊卑分脈』を詳しく調べられた成果によりまして、『御伝鈔』の言い伝えである、日野家の御出身で、父上有範卿ということは、動かない事実になってまいっております。それを疑うということは、今のところでは歴史学の議論のそとに出るようになります。いかに中沢さんの意見がするどいものであったにしましても、中沢さん自身が、自分の説の不十分であったことをのちに承認せられているのでありますから、今日、その議論をとりあげる必要はなくなっているのです。

次の問題は、九歳の春に親鸞聖人がお得度になった時に、慈鎮和尚がはたしてその時に、この青蓮院におられたかどうかということであります。ご得度の時期と考えられる治承五年の三月ごろ慈鎮和尚はどこにおられたかという問題であります。御承知のように、慈鎮和尚のお兄さんは九条兼実であります。この九条兼実と慈鎮和尚は、お

母さんが同じ兄弟でありまして、生涯仲よく交際をしていました。兼実は、親鸞聖人が得度をされます数年前からやく三十年ほどにわたって詳しい日記を書いておられます。それは、玉葉と呼ばれる日記でありまして、われわれ中世史を専攻しますものにとってこの玉葉は、親鸞聖人御在世の時代の信頼できる史料として、重要なものになります。ことに、九条家には、九条兼実の自筆本ではありませんが、どう考えましても、鎌倉もそうあとの時代ではないと思われる玉葉の写しが、今日でも残っているものでありまして、玉葉を通じて平安時代の終りから鎌倉時代にかけての歴史というものが、非常によくわかります。親鸞聖人が得度をされます前後の慈鎮和尚の動静も、玉葉によってくわしく判明します。何月何日に慈鎮和尚は、どこにいらったかということまで明らかにするのであります。その点から、親鸞聖人が九歳の春のころに得度をされたとするならば、慈鎮和尚は、この青蓮院にはそのころおられなかっただろうという議論をされる学者がいられます。また親鸞聖人が得度をされました時には、慈鎮和尚は、まだ青蓮院を師匠の覚快法親王から相続しておられないはずである。それゆえに親鸞聖人が青蓮院で得度をされるといふような事はありえない。こういうような議論をされるかたもあるわけであります。それからまた、この時代は青蓮院ができてまだまもなくの時ですが、はじめは青蓮房といって、叡山の上にあります。親鸞聖人が青蓮院で得度されたというならば、それは粟田口の禪房ではなく、叡山の山の上の青蓮房のはずであるという議論もでてくるわけがあります。こう申してまいりますと、多くの疑が出てまいります。最初に玉葉という正確な史料をもとにしまして、慈鎮和尚の動静を明確にし、親鸞聖人がお得度された時に、慈鎮和尚は、どこにおられたであろうかという問題を明らかにしなければなりません。その次には当時の慈鎮和尚は、何を考え、どういう立場におられたかという問題が、一つ出てきます。

親鸞聖人が得度をせられた治承五年は、その前の年に源三位頼政と以仁王が中心になって、兵をあげそのあと東

国では頼朝が挙兵しています。この年の春には、平清盛が思いがけなくぼくつと熱病で死ぬ。そういう事態が起きて、永久に続くかと考えられていた平家の世界に急に変調のきざしが表われて来た時代であります。そしてまた、この年とその翌年にかけては、京都では四万人以上の死体があったといわれるような大凶作となりました。その無惨な状態は、鴨長明がかきました『方丈記』に詳しくでています。政治上の面にも、経済上の面にも非常に困難な問題が生じた時であります。親鸞聖人のお得度というものも、おそらくそういうことと無関係ではありえないと考えられます。この時代に、親鸞聖人のお師匠になられた慈鎮和尚は、何を考えておられただろうかということを、考えざるをえません。

慈鎮和尚は、親鸞聖人が得度される少し前から叡山の無動寺で、千日の入堂という三箇年にわたって、不動明王の前で行法を重ねておられました。和尚が不動明王にお願いされたのは、不動と同じく心が動かない、安心立命をえたいということであつたと考えられるのであります。ところが、この千日の入堂というものは、今日でもやはり叡山で大変な荒行の一つとして、行なわれているようであります。その入堂を慈鎮和尚が、貴族の出身でありながら、非常にこれを真面目にやり遂げようと思つて、一生懸命になつて修行しておられた。慈鎮和尚は、その点、親鸞聖人のお師匠になられただけの値打ちのあつたかたであると考えられます。貴族出身とは思われません。一生懸命に仏法の修行というものに励まれたかたであります。

ところが、この慈鎮和尚が、無動寺において行をしておられる時に、叡山に一つの重大な問題が起きました。それは何であるかといえますと、叡山が二つにわかれて、学侶と堂衆が、叡山の内部で争いをする事になったのであります。学侶というのは、政府から供料、今日でいいますと、奨学金であります。奨学金をいただいて、仏法の学問の修行をした僧侶を学侶といひます。それに対して堂衆というのは、本来そういう学侶に色々なサーヴィ

スをする僕であつたものが、のちに僧侶になる。これがすなわち堂衆であります。堂衆は親鸞聖人が、叡山においてつとめておられた堂僧というものと、性質の異なるものであります。親鸞聖人は堂衆であつたと、一度いわれたことがあります。それは堂衆と堂僧との区別を十分はつきりできなかった時の誤解でありまして、親鸞聖人は、決して堂衆ではありません。この学侶と堂衆は、召使うものと使われているものであります。この両者が争うというのは、今日で申しますと、一種のストライキのような形をとり、もっと激しい戦いをしたのであります。治承二年ごろから、親鸞聖人の得度されます二、三年前から、叡山はそのためにかく山が二つにわかれて争いが激しくなりました。学侶に対して堂衆の人たちが、奉仕することを拒否しました。その争いの影響を最も大きく受けたのはだれであるかと申しますと、無動寺の堂の中にこもつて千日の行法というものを完成しようとして、日夜励んでいたところの慈鎮和尚でありました。千日の入堂をした人は、慈鎮和尚お一人ではなかつたようではありますが、他の人たちは、堂衆が奉仕をしなくなったことを機会に、千日の入堂というのをやめてしまいました。慈鎮和尚は摂政忠通の末子で、お母さんが早くなくなったという悲運に際会されて、出家をされたということもあるわけですが、敢然として山を下りないで、千日の行法というものを続けられたのであります。そこに、慈鎮和尚という人の僧侶としての一つの面をみることができます。治承三年三月の末になつて、ようやく千日の行法が満願となり慈鎮和尚は山をおりたのであります。四月二日に、兄の兼実を訪ねて、その心境を語りました。本来ならば、千日の大願が満了したのでありますから、自信満々として兄を訪問した、と考えられるのであります。慈鎮和尚は、もう世間の事はおよそ意味がないから、自分はこれを機会に、世の中を隠退したい。僧侶の世界からのがれて遁世をしたいということを語つて、兄の兼実を驚かしたのであります。やがて慈鎮和尚は西山に隠退をしまして今日の善峯寺ヨシミネの近くに三鈷寺サンゾジという寺がありますが、そこがすなわち慈鎮和尚のかくれられた場所であり

ます。

なぜ千日の行法を完全につとめあげられながら、世間の事は大略無益である隠退したいというふうと考えられたか。わたくしなりに推測いたしますと、本来、和合の世界をつくらなければならない僧侶、人間の生まれ階級というものを超越して一味の世界というものをつくらなければならない僧侶が、学侶であるから、堂衆であるからといって、そこで殺し合いのあさましい争いをする。何とも言いようのないなさない現実のために千日の入堂の修行というものも、大半の人は、それを放棄しなければならない。その悲しみというものが、せっかく、千日の入堂の行の大願を満了した慈鎮和尚に、深刻な絶望感を与えたのではなからうか、と考えます。それで和尚は西山にくれられたのでありますが、和尚にとっては師匠に当たられる覚快法親王の病気が次第に悪化されたのであります。それで西山にいつまでもかくれているわけにはいかなくなりまして、慈鎮和尚は、京都へ出て来られました。

それは治承五年二月十七日であることが玉葉によって明らかであります。慈鎮和尚はお師匠の覚快法親王から早く白川坊を譲られていました。この白川坊が今日の青蓮院の始めをさすものでありまして、慈鎮和尚が京都に出てこられた場合に、起居される、ねとまりされる場所であったと考えられます。慈鎮和尚が西山から白川坊に出てこられたとき治承五年二月は、親鸞聖人が得度された時と伝えられている時であります。慈鎮和尚は、お師匠の法親王が生きておられますので山上の青蓮房は、まだ相続しておられませんが、白川坊は、それより前に、得ておられました。したがって、この親鸞聖人が青蓮院で得度をされたというのは、正しく申したならば、白川坊で得度をされた、と申すべきではなからうかと考えます。聖人九歳の春のころに、今の西山から京都へ、慈鎮和尚は確かに出てきておられますから、『御伝鈔』の伝えのごとくに、この所において、親鸞聖人が得度をされたというふう考えましても事実にあっている、と思うのであります。

もう予定の時間が過ぎましたので、もう一つ簡単にお話し申し上げまして、括りにいたしたい。それは、今申しましたように、この世間の事はすべて無益であると、この世に対し、のぞみをたつたはずの慈鎮和尚が、その後、どういうふうな心境に到達されたかという問題であります。慈鎮和尚は、親鸞聖人が得度されましたあとで、今日滋賀県の高嶋郡タリシマでございますか。そこに葛川カツラガワという所がございまして、明王院という、滝に出現する生身の不動明王をおまつりしているお寺がありますが、そこに行かれるのであります。その行場において、一心不乱に慈鎮和尚は行法をされるのですが、その行法の最中に、俱利伽羅クリガラという劔が巻きついた、真言密教の方で非常に重んじられる俱利伽羅龍王の出現というものを感得せられる。そうしてこの奇蹟を経験せられたということが、慈鎮和尚に大きな感動を与えたのであります。世間は凡そ無益である、この世は末法であって、仏法というものは、正しく行われる可能性はないのである、という絶望感にとらわれていた慈鎮和尚に対して、新らしく再出発する勇気をあたえたのであります。親鸞聖人はその前に慈鎮和尚について得度されているわけでありす。その御師匠が、このような経験をお持ちになったということ、これは聖人になにほどの影響を及ぼしていると考えます。しかし聖人はそういう奇跡というものに宗教的な安心の世界を見いださなかったのであります。宗教というものは、奇蹟を現するものであっても、奇蹟によって成立するものではない。親鸞聖人と慈鎮和尚とのちにお別れになるのは、宗教に対する両者の考の違いに基づくものと考えます。その意味で、この青蓮院で聖人が始めて僧侶になられたことは意味深いと考えます。